



JICA九州ネット

jgn

第7号

DOMO ARIGATO GOZAIMASHITA *

title:日本が勉強の現場!? *

つつんトンガへ行く *

国際理解教育の醍醐味とは? *

美味しいCoffeeできました、スリランカで。 *

"DOMO ARIGATO GOZAIMASHITA"

研修の最終日に行われた個別プレゼンテーションの最後に、ほぼすべての研修員が口にした言葉である。これは研修に携わったJICA職員、コースリーダー、コーディネーター、そしてあなたを含む日本のすべての人々に向けて贈られた言葉だと感じている。

■ JICA九州インターンシップ中の二週間、私は主に研修員受入事業(以下、研修事業)を視察してきた。この研修事業視察で私にとって最大のインパクトとなったこと、それは日本のすべての人がこの研修事業を支えているということだ。…え？すべての人？いやいや、研修員受入事業なんて初めて聞いたし、そんなのに関わった覚えなんてないよ…、と思う方もいるかもしれない。でも実はただご存じなかっただけで、あなたもばっちり研修事業を支えてくれている方々の一人なのだ。…では、なぜそんなことが言えるのか？それは、「あなたが納税者だから」である。研修事業はODA(政府開発援助)であり、政府の事業の一環である。つまり、必要な費用はすべて税金によってまかなわれている。その税金を払っている日本の人々は、すなわち研修事業にお金の面で協力していることとなる。

このように、消費税などのさまざまな税金を納めることによって、子どもからお年寄りまですべての日本人の人々が、研修事業を支えているのだ。今回このことを知った時、私はそれをとても誇らしく感じた。研修事業の成果は、いずれは研修員たちの母国の発展とその人々の幸せのために役立てられるだろう。そこに、間接的にではあるが日本の私たちは貢献しているのだ。大げさかもしれないが、日本のすべての人々が海の向こうの誰かの力になっているというのは、とても嬉しいことだと感じた。

■また、研修事業への協力のあり方は納税を含め実に多様なものであることも直に学んだ。研修事業視察では、直接それを支える多くの日本人の方々にお会いしたのだが、彼らとの出会いは私にとって大きな衝撃となった。英語で楽しそうに研修員達と話したり指導したりしている、近所の道端にいそうな普通のおじさんたち。また、研修員たちのよりよい研修理解のため尽力されている通訳の方々。前者は研修内容を組み立てるコースリーダーの方々であり、後者は通訳を務めるコーディネーターの方々である。

>>>次のページへつづく



DOMO ARIGATO GOZAIMASHITA



DOMO ARIGATO GOZAIMASHITA

両者とも各研修事業には必要不可欠な、その核となる方々であり、研修の全日程中研修員たちに同行する。コースリーダーは各分野における専門家の方々なのだが、私がお会いした中では退職後のシニア世代が多かった。自身の専門的知見をもって研修をリードしていく彼らの姿からは、このように一般の人々も自身の専門を生かして研修や国際協力に携わることができるということを学んだし、その生き生きとした表情に見ているこちらも元気をもらえたものだ。一方、通訳をするコーディネーターの方々からは、研修員を思う熱い気持ちを感じた。ただ講師の話を訳すのではなく、いかに研修員たちにわかりやすく伝えるかという工夫をつねに凝らしながら通訳をし、また研修の時間外にも次回の研修のための準備を重ねる彼らの姿は真摯そのものであり、研修員を思いやる気持ちあってこそものであると感じた。彼らは通訳・引率・世話人という感じで研修員をさまざまな面からサポートしており、“通訳”ではなく“コーディネーター”という名称が実にふさわしい人々であると思えた。

■また彼ら以外にも、研修を受け入れてくださる多くの個人や機関の方々、そして研修の全般的な運営に携わり、デスクワーク・現場視察・海外視察等に忙しく尽力するJICA職員、またJICA九州内で働く人たちの支えも忘れてはならない。このように、研修事業はさまざまな人たちの協力により成り立っている。これは、国際協力への関わり方は多样であるということにも言い換えられる。彼らと直にお会いしたことからそのことを知り、それぞれの立場から研修事業、ひいては国際協力に尽力する人々を尊敬する気持ちを抱いた。

■研修事業視察を通して私の関心が特に惹かれたところ、それはそこへの日本の人々の関わりであった。税を通して、専門知識を通して、デスクワークを通して、程度の差や形の違いはあれ、研修事業は日本のすべての人が支えているものなのだ。自分が海外の人々の力となっていることを、より多くの日本人たちに知ってほしい。研修員さんたちの”DOMO ARIGATO GOZAIMASHITA”が、一人ひとりの日本人の人々に届いてほしいと、そう思っている。

山内優希

九州大学21世紀プログラム在籍
JICA九州でインターンを体験、
マレーシアの民族衣装にも挑戦する





大阪、とあるレストランでの会話>>>

B: 最近外国人が増えたなー。グローバル化の影響やな。

A: あっ、またいたー。

B: なあ、知ってるかー？最近、研修員が増えてきてるんやぞ。

A: へえー、なにそれー？

B: 特定分野で働いている途上国の人を税金で日本に受け入れて技術を学んでもらうこと。

A: ええやん。それー。さすがグローバル化。

B: やろ。しかも世界中から140カ国以上の人人が日本に来てるしー。

A: でも、日本に来なくても、別に知識や理念を教えてあげたら充分ちゃうかな。
今はインターネットとかもあるし。

B: 彼らは言葉では分かっていても、やったことないから行動に移すことが難しい。
しかも、習うより慣れろではないけど、体験したほうが早く覚えるし。そもそも日本にある概念があちらではないこともあるし。

A: なるほど。それじゃ、何でJICAがやってるの？

B: JICAは技術移転を通じた国際協力のパイオニアだから。

A: 具体的に言うと？

B: 発展途上国の多様化するニーズと技術を持った地域リソースとをうまくマッチングさせる。途上国の人と技術提供先をくっつける接着剤みたいな役割やな。

A: ふーん、わかったようなわからんような。んで、研修事業の流れは？

B: だいたいこんな感じ。



ブリーフィング 日本での生活基本情報
ジョブレポート 研修の課題・目的を各自発表

講義・実習
アクションプラン 帰国後の具体的な行動計画作成

評価会 研修員から研修に関する意見を聞く
閉講式 修了証書授与 研修員挨拶
関係者が集まり、研修の意見交換

フォローアップ 研修の成果を評価する

>>>次のページへつづく



研修受入先
研修プログラム組立・実施

JICE 日本国際協力センター
現場で通訳等を行い研修を管理

A: うまいこと役割分担ができるんやな。

B: ほんとに、一つの研修だけでも何十人ものひとが関わってるんやで。

A: 使われる言語は？

B: 研修によっていろいろやけど、英語とスペイン語が多いな。フランス語とかアラビア語とか他の言語で行われている研修もあるらしいけど。

A: ふーん、それでどういう研修があるん？

B: 環境、保健医療、経済開発、地域開発等幅広くやっていて。インターナン中に関わったのは、

1. 下水道維持管理システムと排水処理技術
2. 中南米プロセス工業におけるクリーナープロダクション
3. 食品保健行政
4. 中小企業・地場産業活性化

の四つだけやけど、JICA九州の場合、年に100件くらいの研修を行っていて、700名程が来日しているらしい。

A: すごいなー。研修員はどういう人を受け入れているん？

B: 帰国してからこの研修の成果を実践出来ると思われる人達。話しを聞くと、その国での地位がそれなりに高い人の気がする。途上国ではボトムアップ（下から上）より、トップダウン（上から下）のほうが影響力がある場合が多いから、そういう人を対象に受け入れているらしい。

A: 本当に役立っているんかなー？

B: 研修員の声

Nさん From Egypt 「日本に来られるチャンスをもらってありがたい」

Lさん From Thailand 「いろんなことを学べるから楽しいよ」

JICE日本国際協力センターの方の声

Oさん 「どんな失敗を日本がしてきたか、見てもらったうえで同じ過ちを犯さないようにしてほしい」

A: そつか。役立ってそうやから友達にも話してみよーかな。

B: そやな。何事も知ることから始まるし。

■この会話は、ある学生二人の会話である。JICAの研修事業。この言葉を聞いて具体的な形を思い浮かべる人がどれくらいいるのだろうか。私はこの2週間のインターンを通して、断片的ではあるが、研修事業を理解出来たと思っている。一つの研修事業をとっても研修員・研修実施機関だけではまったくといっていいほど動かない。研修員・その家族、JICA職員、JICEの研修監理員（コーディネーター）、コースリーダーを始めとする受け入れ先の職員の方々、宿泊施設の方々、地域住民等数えきれない人が研修という一つの目標に向かって協働して初めてプロジェクトが始動する。もちろん、この研修が完璧だとは言えない。ただ、研修員さんの「DOMO ARIGATO GOZAIMASHITA」に耳を傾けてみてほしい。中にはもう二度と日本に来ることのできないという思いを抱えて研修に参加している人もいる。グローバル化が強く呼ばれている昨今だからこそ、今一度、世界の中の日本人としての自覚を持つ必要があるのではないか。

■国際協力といえば大きさかもしれないが、研修員を受け入れるという事業を通して、国境を跨いで人と人が触れ合い、それが将来何らかの形となって日本に返ってくることを思えば、税金も有意義に使われているとは考えられないだろうか。むしろ、我々のリターンの方が大きいかもしれない。



JICA九州でインターンに参加、研修紹介の文章を作成し、また、感想をくれた立命館アジア太平洋大学の足立伸也君



筒井慎之助 ついしんのすけ
かつてJICA九州のフロントに勤務。
「つつん」と呼ばれる。その後、
青年海外協力隊に参加。日本語
講師としてトンガ王国に派遣され、
着いて早々に発熱、一週間寝込む。
回復後、トンガタイム、胃にもたれる
食事、意外と寒い気候などを次々
と克服。精力的に活動をつづけ、現
地の人々の信頼を得る。

詳しくは、jqn創刊号、jqn第3号を。

つつん トンガへ行く

不定期連載 第3回

マーローエレレイ！ フェフェハケ？（こんにちは！ お元気ですか？）

みなさん、お元気でしょうか。トンガ協力隊員、筒井慎之助です。トンガ語もだいぶ上達し現地の人たちと以前よりもうまく交流ができるようになりました。また、トンガでは雨水を飲むのですが水にボーフラが入っていても「ま、いっか」と思えるようになりました。最近ではトンガ人と一緒に畑に行っていもを掘ったり植えたりと、トンガにどっぷりとはまった生活をしています。そんなこんなで、気付くと前回の掲載から半年以上経ってしまいました。と同時に、僕の2年間の活動も残り1年となってしまいました。早い！ 時間が経つのは本当に早いです。気がついたら協力隊の活動が終わっていたなんてことにならないように、残りの協力隊生活も気合を入れてがんばろうと思います。今回は、そんな僕が活動をしている学校トゥポウカレッジを皆さんに紹介したいと思います。

トゥポウカレッジは首都から車で30分くらいのところにある森に囲まれた学校で、大洋州でも最も歴史のある学校です。トンガではトロアという愛称で親しまれています。また、前トンガ国王トゥポウ4世が勉学に励まれた学校としても知られています。全寮制の男子校で、ラグビーで有名な学校です。11歳くらいから20歳くらいまでの生徒が構内にある宿舎で共に生活をし、勉学、スポーツ、畠仕事に励んでいます。全校生徒数は約700人。そのうち、日本語を勉強している生徒数は約60人くらいです。ラグビーで日本に留学する生徒がいるということから日本語教育が始まりました。現在日本代表メンバーとして活躍しているトンガ人ラグビー選手のほとんどが当校出身者です。 >>>次のページへつづく



さて、ここトロアで去年の10月にジャパニーズウィークという行事が行われました。例年行われていて、全校生徒を対象にしているので、協力隊員が学校全体に日本の文化を紹介する絶好の機会となる行事です。ジャパニーズウィークの他にもイングリッシュウィーク、サイエンスウィークというふうに、すべての教科に対して、このように日頃の成果を発表するための1週間が設けられていて、朝礼、休み時間などを利用して発表が行われます。今年のジャパニーズウィークでは、以下のようなことを行いました。

すいか割り、そろばん計算大会、日本〇×クイズ、エアロビクス、騎馬戦、日本の歌、折り紙、着物の試着、日本食体験。

1週間という短い間にこれだけの量のイベントをこなせるのだろうかと、多少不安もありましたが、他の隊員にも手伝ってもらい盛大なイベントとなりました。このイベントで一番印象に残っていることは、日本語を勉強している生徒が様々な場面で自発的にフォローをしてくれたことです。例えば、そろばん大会では、屋外で行ったこともあり風の強い中で行ったのですが、問題用紙が飛んでいくというハプニングが起こりました。そのときに、紙を拾って助けてくれたのは日本語の生徒でした。また、エアロビクスでは、思った以上にエアロビクスを恥ずかしがる生徒が多く、エアロビクス隊員が前で指導しているにもかかわらずただ見ているだけという生徒が多かったのですが、このときも日本語の生徒が率先して参加してくれました。日本〇×クイズでも、僕が英語で読んだ問題を理解できない生徒のために日本語の生徒が前に出てきてトンガ語で説明をしてくれました。

イベントの最後を飾る日本の歌発表のときには、音響機器の調子が悪くなりやむなく中止にしようとしたら、生徒が大きな声で歌ってくれたので最後まで続けることができました。このような生徒の自発的なフォローを今回たくさん見ることができました。

準備の段階では、一生懸命になるあまり何から何まで自分一人で進めてしまったのですが、最初から生徒と一緒にこのジャパニーズウィークを作り上げていればもっとよいイベントにできたのではと、終わった後に反省しました。それでも、生徒はこのイベントを楽しんでくれたらしく、今年のジャパニーズウィークも楽しみにしてくれています。このイベントの後に行われた職員会議では、校長先生が「みなさんもジャパニーズウィークのようにそれぞれのウィークを盛り上げてください」と言ってくれました。努力が評価された気がして本当にうれしかったです。

■では最後に、騎馬戦を行った際に起きたトンガならではのエピソードを皆さんにご紹介して、今回の報告を終わろうと思います。

生徒に騎馬戦のルールを教えていた時のことです。上に乗っている人が騎馬から落ちたら負けというルールを知った生徒たちがおもむろに動き始めました。そしてものの数秒後、そこにはラグビーのスクラムの要素を取り入れ十数名程の生徒で組み立てられた、やたら大きくて斬新な形をした強靭な騎馬が。腰を曲げたり肩を組んだりと奇妙な体勢をとった生徒たちが一齊に僕の方を向き、得意げな顔でニヤリと笑います。その顔には「どうだ、これで絶対に負けないぞ」という言葉が。ほんの一瞬で、こんな立派な騎馬を作り上げてしまうトンガ人、笑う前に感心してしまいました。さすがラグビー大国、トンガです。

それでは、みなさん、またお会いしましょう！ノフォア！！





開発教育の醍醐味とは？

開発教育の2つの醍醐味を感じたインターン実習

■開発教育は、まだ日本では馴染みが浅く定義もあいまいで、国際理解教育と混同することもあります。しかし開発教育は、より大きな意義を含んでいると思います。JICA九州の市民参加協力課でのインターン実習の3ヶ月間を通して、開発教育の場を自ら体験し、開発教育について考える機会を多く得ることができました。これまでの知識に基づいた「世界の様々なことを学ぶ」という開発教育に対するイメージが、実践を経て違った印象を持つようになりました。そして、開発教育の持つ二つの重要な意義と醍醐味を感じることができました。

■開発教育の大きな意義の一つは、その後の国際協力への第一歩になることです。開発教育を通して世界の異なる歴史・文化を伝えることで、世界への興味が湧き国際問題への関心が生まれることを促します。さらに開発教育では、関心のある問題に対して、たとえ小さなことでも自分では何ができるのかを考えることに取り組むことも特長です。インターン実習中に携わった高校生国際協力実体験プログラムでは、生徒達が仲間と共に世界の状況や自分の生きている環境を真剣に考え、自分達の視点から世界の問題への解決策を模索しました。その生徒達はプログラムを経て、最終的には国際協力へ向けて今、それぞれが出来ることを見つけたようでした。“地域のボランティアに参加する”や“世界の問題をもっと勉強してまわりの人人に紹介する”など、始まりは小さいですが、将来の国際協力への第一歩となると思います。今、この場から始まる国際協力を生み出す開発教育、つまり国際「開発」へ向けた教育であることが、開発教育の第一の魅力です。

■開発教育のもう一つの意義であり大きな醍醐味は、開発教育は日本の将来へ向けた教育であるということです。物は溢れているのに心が満たされていない現代の子ども達に、“考えること”や“感じること”を通して「強く生きる力」を育むものであるということに改めて気づきました。問題に目を向けて解決策を探る過程で、分析力や問題解決力が養われます。また、議論を重ねる中でコミュニケーション力が付き、共生することを学ぶことができます。インターン実習の集大成として取り組んだ大学生との協働のワークショップでは、主体の大学生の自主性と積極性を尊重するために、企画から運営に至るまでを大学生に任せました。初めは何もかも手探りでぎこちなかった大学生が、試行錯誤を重ねるうちに自ら考えて活動するようになりました。仲間達との結束が強くなり、与えられたものをこなすのではなく自分で行動するための手段と方法を考え出して、実際に行動に移すことができるようになりました。国際問題にどのように向き合うのか考えるうちに、大学生達が少し成長するのを垣間見ることができたワークショップでした。人間としての開発がある点も、開発教育の大きな魅力だと思います。

■今、振り返れば、JICA九州でのインターン実習そのものが私にとっての開発教育の一環だったように思います。第一に、開発教育プログラムを体験させていただく中で、国際協力に携わりたいという思いが大変強くなりました。プログラムで取り上げられた国際問題や国際協力についていろいろと考えさせられました。そして、開発教育を通して人々に伝える内容を自らの中に蓄えたいと強く思うようになりました。私は開発教育の指導者としてのトレーニングを受け、開発教育の手法や教材についてもインターンを通して勉強することができました。しかし開発教育に関する知識はあって、自分の経験に基づいて話す内容が自分の中にはないことを痛感しました。自分の体験を基に、自分が感じたことを自分の視点で開発教育に活かして、いろいろな人に伝えていきたいと思いました。のために自ら国際協力に積極的に参加して、国際問題や国際協力について自分で考えていきたいです。将来は、自分の心の声を自分の言葉で伝えていく生きた開発教育をやりたいと思います。そして第二に、インターン実習は私にとって大きな学びと成長の機会でもありました。まず、様々な開発教育プログラムを体験させていただき、実際の開発教育の現場を知り、開発教育の価値や意義、醍醐味と共に難しさを感じることができました。開発教育と一緒に言っても、その対象ややり方も様々であり、参加者に与える影響や参加者がそこから感じ取ることも決して一様ではないことも実感しました。また、ワークショップを企画する過程においては、企画のやり方や自ら進めていく実行力の重要さを得ました。新しいことを生み出す発想力と機転、待っていては何も始まらずチャンスを逃さないように自分から行動を起こし、時には適切なアドバイスを受けることがインターン開始時の私には欠けていたものでした。そして最後に、仕事に対する姿勢と心意気をインターン実習中にJICA職員から学びました。常に先を見据えて新しい視点で現状を捉え、そして現状に甘んじないで改善していくこうとする職員の後ろ姿がとても印象深かったです。私も将来へ向けて、視野を広げ熱意を持って何事にも取り組む意思を強くしました。得るもののが大きく、自分の成長や発展になりました。

■開発教育にどっぷりと浸かり、開発教育について深く考えることができたインターン実習でした。未来へ向けた教育であるという開発教育の醍醐味が、私の心に染み入りました。開発教育では、世界の文化や国際問題を伝えて共に考えていきます。あなたは開発教育を通して何を考えてみたいですか。子どもの未来へ向けて、何を伝えていきたいですか。



中内真子

Mako NAKAUCHI

MA in Education and International Development
Institute of Education, University of London

開発教育の醍醐味とは？





美味しいCoffee
できました、スリランカで。

■スリランカで農村支援活動をしているNPO日本フェアトレード委員会(代表:清田和之さん熊本市鹿子木町)は、スリランカ農業輸出局の局長、副局長を熊本市に迎え、フェアトレードセミナーを開催しました。委員会は、スリランカでかつて行われていたコーヒー栽培を新たな商品作物として復活させ、フェアトレードの購入システム導入することで現地農民の適正賃金確保、生活・労働環境改善、そして、地域発展に貢献する活動を行っています。JICAは、同委員会の活動を「草の根技術協力事業」という支援事業を通して応援しています。

■セミナーでは、農業輸出局長によるスリランカの概要が紹介されました。スリランカは、九州より一回り大きい島国で、多様な気候に恵まれ、シナモンや胡椒等のスパイス、紅茶、宝石等豊かな資源を持ち合わせています。美しい風景写真と共にスリランカの魅力を伺っていると、スリランカに行きたくなります。また、副局長からは、コーヒーの生豆を選別、洗浄、乾燥し、袋に詰めて輸入するまでの様子が数々の写真と共に語られました。いつも気軽に飲んでいるコーヒーが、初めは赤い豆の姿をしており、その後、様々な加工を経て、ようやく黒い飲み物になることを知り、大変興味深いお話でした。



写真:スリランカ中央部、コットマレー地区のラヴァナゴダ村(標高1000m 580人 164世帯)のプロジェクトで建設されたコーヒー加工場の様子。昨年末、この加工場で生産されたフェアトレードコーヒー豆400kgが、初めて日本に向けて出荷された。写真提供(特)日本フェアトレード委員会

■このプロジェクトに強い関心を示した在日スリランカ大使は、セミナー前日に熊本を訪れ、局長らと共に、知事や熊本市長と懇談し、熊本発のスリランカフェアトレードコーヒーの発展に期待を寄せています。その夜開催された懇親会には、スリランカに縁がある70名程の参加者が集まり、盛大な会となりました。大勢の方々に拍手で迎えられたスリランカの皆さんの中に女優、アネスタ・バーネットさんの姿がありました。この機会にスリランカやフェアトレードについての理解をより深めてもらおうと、フェアトレード大使として来熊したのです。独学で勉強したと思えない程上手な日本語を、丁寧にゆっくり話される真摯な姿に、会場の皆さんには温かい拍手が贈られました。懇親会では、実際に今回のプロジェクトで出来たコーヒーが振舞われましたが、大変香りが良く飲みやすいおいしいコーヒーで、コーヒー好きの私は、つい何杯もおかわりをしました。

■次回のコーヒー豆収穫は8月の予定です。収穫期には、村が一丸となって作業に取り組み、忙しくもありますが楽しい時間でもある共同作業の日々となります。 報告:原田真帆 JICA九州市民参加協力調整員

美味しいCoffeeできました、スリランカで。



トンガの研修員の方からいただいたお土産です。
海とツナガリの深い人々の姿です。

5月22日と23日、北海道占冠村トマムで太平洋・島サミットが開催されました。南太平洋の島国が集まりました。これら大洋州の島々は、日本でも南国リゾートとしてよく知られていますが、ライフスタイルの変化、人口増加などにともなうゴミ問題、気候変動による環境悪化や水産資源の減少など様々な問題に直面しています。こうした諸問題を話し合うために、日本の呼びかけで始まったこのサミットは、1997年の第一回から数えて5度目の開催となりました。JICA九州では、5月末から「大洋州廃棄物管理ワークショップ」が始まりました。クック、フィジー、キリバス、マーシャル、ミクロネシア、ナウル、パラオ、パプアニューギニア、サモア、ソロモン、トンガ、ツバル、バヌアツの島々から研修員を迎えました。